

## キラリティの起源と生活世界における右と左の意味

### The origin of Chirality and the sense of Right and Left in the Life-World

小川 侃  
Tadashi OGAWA

山梨大学講演 2014年3月31日甲府湯村ホテルにて

当日ご招待いただいた鳥養映子先生と広島大学教授、井上克也先生に感謝申し上げます。

(なお、講演のときには、文献と引用箇所を明記してあったが、一般には読みにくいし不要なので今回は省略した。)

表題のキラリティという言葉は、現代の化学では周知の概念である。この言葉は、ギリシャ語の *cheir* ( $\chi \epsilon \acute{\iota} \rho$ ) に由来し、さらに手、手のひら、拳、腕、側面ないし側という意味を持つ。

左手と右手は人間の身体に属しているが、おのずからその機能は区別されている。身体は空間のなかに見出され、その結果この右手と左手の機能の区別と差異は多くのことを考えさせる。「ひだりぎच्छょ」とか、「右利き」などと言う言葉が日常用語に見られる。

右手と左手との違いに着目した詩もある。

「左手の仕事」、小川聖子

「右手が万年筆で、ものを書きたがる時  
キャップをはずしてくれるのは左手  
右手が腕を袖に通したいとき  
袖口から肩へ誘導してくれるのも左手  
ヴァイオリンを弾くとき  
右手に弓をかまえ  
左はネックを支えてフィンガリングを受け持つ  
この楽器の徹底分業振りにヒトの男女分業も顔色なし  
ピアノで左手はドミソ・ファラド・ソシレの伴奏や  
やわらかい和音を受け持つことから始まり  
右手を追いかけたり右手に呼応する  
低音部で主旋律を忙しく奏で続けて獅子奮迅のはたらき  
時には左右の手が交差するピアノは  
完全融合の大舞台！  
ある芸術家は友人のために左手だけの曲を作曲した  
むかしヒロシマに住んでいたとき  
年中長袖の作業衣を着て  
御用聞きに廻っていたお米屋さんがいた

左手の肘の関節から下をピカにうばわれたらしい  
十キロの米袋を左上腕と脇の間にがしっと挟み  
『まいどどうも』って優しい声をかけてくれた」

この左手と右手の差異、交換不可能な区別にキラリティは乗っかっている。このように右手と左手とは、私を取り囲む空間と世界のうちで異なった方向と意味を与える。

哲学は、学問であるが、しかも専門科学ではない。本当のことを言うと、哲学は学問といえるのかどうかあやしい。人間は生きている限りなんらかの仕方では知恵、よく生きる知恵を求める。それが、哲学だ。だから、哲学は学問ではあるが、科学ではない。また宗教でもない。だからといって詩や文学でもない。古代ギリシャにおいて哲学は、ホメロスなどの詩からも、イオニアの自然科学からも、またクセノファネスなどの神学からも異なったものとして区別された。哲学というのは生きるための知恵であり、なによりも知恵を探求するための一種の対話術であった。哲学者は今日でも古典のテキストの解釈を行うが、これは、古典テキストとの対話を行っていることにほかならぬ。

科学はすべて一定の専門をもち、研究すべき対象をあらかじめ世界の中から切り取り、決定している。つまり、専門科学だ。それに対して、哲学は科学とは一線を画しており、哲学は科学ではないし、また学問ではない。哲学には専門はない。哲学は人間と世界の全体をテーマとする。科学はそれに対して一定の狭い範囲の、限定された対象を深く研究する。だが科学者は研究の際に己の身体を使っている。実験の際には己の目で見、手を使用して結果

を確定する。ところが、研究を確定し、研究の結果を発表し、講演し、コンピュータに入力する際には、己の身体を使用し、行使して実験したことを忘れて

いる。現象学の創設者のフッサールは、最晩年にはガリレオを代表とする近代科学を批判している。科学者は研究の結果や成果を作り出すために己が使ったものを忘れている。生活の世界、己の身体を忘れている。科学は、本来は科学者が実験実践の中で工夫をして作り出した理論であるにもかかわらずその科学の原初の姿を忘れている。これは、フッサールの最晩年の哲学のひとつのテーゼだ。科学者には一種の己の身体の忘却、己の実存の忘却が認められる。もとよりこのような自己の忘却があるからこそ科学者は物体、物象を研究できる。このフッサールの近代科学への批判は、パスツールの化学に於ける大発見の前に崩れてしまうというのが今日の私の話の鍵だ。

私の見るところでは、化学者は一般に自己の身体を忘れて、実験室で実験をしているように見える。実験のときに身体を使うが、化学の論文を書くときにはその身体を忘れてるように見える。これは、フッサール以来科学の基底の忘却、「生活世界の忘却」といわれている。科学では身体と生活の世界が忘れられているという<sup>o</sup>のが、フッサールの近代科学への批判の原型だ。化学者は実験室で実験する際には自分の身体を使用しているのだが、実験の成果を解釈する時にはそれを忘れている。むしろ、忘れるからこそ化学の実験の成果を考え解釈することができる。それはちょうど私たちがどのようにしたら球にバットを当てることができるかを忘れる時にうまく球を打つことができるのと同じである。哲学が行うのはこのよく使用され忘れられている身体をもういちど考察の対象とすることだ。化学が忘却している実験の際の身体をもう一度考察の対象とすること——これが哲学することだ。化学が忘れていることとは、私が身体とともに生きていることである。現象学には方法や考察の仕方について、主題性と操作性という概念の区別があり、この区別がここでは重要である。それでは、主題性と操作性というのは何か。概念についても、現象学では主題的概念と操作的概念という区別をする。

主題化というのは、つねに考察の対象として意識化し、意識の対象とするということだ。実験に際し

て、たんに身体の随伴が意識されているだけではなく、むしろ常に身体を意識化しつつに意識の対象とすることが現象学的な考察である。身体や腕、両手をそのように取り扱うことの意味を考えてみよう。手を使わないでじっと手を見つめるときには手は主題化されている。逆に言うと、手を使っている限り手は観察と考察の対象にはならない。これは、操作している限り主題とはならないという風に言い換えることができる。

私が理解している限りでは、化学の結晶構造には右旋回と左旋回がある。化学のなかに左と右の差異が認められると言うのは驚きだ。その場合の右や左の差異の意味は何から来ているのか。どこから来ているのか。ここには身体の右手と左手の差異が、何らかの仕方で関わっている。この右と左の旋回は一体何を意味するのか。そもそも化学の分野はこの「手」と言う意味を持っているのではないか。ケルヴィン卿がこのキラリティの名付け親だが、化学に於ける「手」の意味とはいったい何か。キラリティがあることをキラル(chiral)という。英語風の発音でカイラリティ、カイラルともいう。これらの語はギリシャ語で「手」を意味する  $\chi \epsilon \iota \rho$  (cheir) が語源だ。手はキラルなものの一例で、右手とその鏡像である左手は互いに重ね合わせられない(右手の掌と左手の甲を向かい合わせたときに重なり合わない)ということだ。

この左と右の差異を最初にはっきりと問題にしたのは、カントである。これは、その後の哲学者に大きな影響を与えた。20世紀のもっとも大きな影響力を持つ哲学者のハイデッガーは、これを「カントの問題」と命名した。それだけではなく、ヴィットゲンシュタインやベルクソンも人間における左と右の方向の差異の起源を主題化している。

まず問おう。このギリシャ語で手という言葉は何であり、その意味はどのようなものか。ギリシャ語の  $\chi \epsilon \iota \rho$  (cheir) には三つの大きな意味がある。第一に、手、拳、腕、側面というような意味がある。第二は近さ、第三は暴力という意味だが、第一の意味が重要である。

Cheirの与格がcheirsi, chersiという表現になる。非常に特徴的なことに、この言葉、手には冠詞がつかない。いいかえると、冠詞がないということは人間、anthroposと同じように冠詞なしで使用しても

よいくらい誰にもわかりきっているということだ。逆にいうと、人間は手なしでは実際には何もできないということだ。ちなみに、20世紀の最大の哲学者であるHeideggerは、人間の周りの世界のあり方を手元に有ること（Zuhandensein）と手の前にあること（Vorhandensein）言い換えると、目の前に有ることとの二つに分けた。このように手は人間のこの世界に関わる仕方の問題に還元できるほど決定的に重要なのだ。

ギリシャ語の話に戻る。ギリシャ語では右手の手を省略して使われて、右といえば、右側ということの意味する。このように手というのは、言葉の上でも使用の上でも常に忘れられるくらい当たり前で分かり切ったものなのだ。言い換えれば、あまりにも当たり前で、意識の対象とはならなくなっている。手は操作の対象であり、操作の対象で有る限りではもはや考察の対象、主題化の対象ではなくなってしまう。

ドイツの重要な哲学者、カントは主著『純粋理性批判』を書く以前に「空間における方位付けの最初の根拠について」（1768）と、1786年には『純粋理性批判』を踏まえて「思考において自己を方向付けるということは何を意味するのか」という論文を書いた。

カントの意図はLeibnizの空間論を批判することにあった。ライブ（プとするのが一般であるが実はプが正しい。）ニッツは、空間とはその諸部分相互の間の関係だと考えたのだがこれはカントにいわすれば不可能だ。右手とその鏡像（おおむね左手に相当する）とは3次元空間ではまったく同じ空虚（空隙）を占めることはできないにもかかわらず右手についてなされたその諸部分の関係の記述は左手にそのまま妥当する。言い換えると、右とか左とかいった方向の区別は物に内在する固有性ではなく——なぜなら右手と左手とはまったく同じ幾何学的な特性の記述をもつが合同となることはできないから——却ってカントはこの方向の区別がそこにおいて成立する絶対的な空間を想定する権利があると考えた。右手と左手とが「合同とならないペア、一対」であることが理解できるのはおのおのの絶対空間を考えることによってだ。右手と左手との存在こそ絶対空間の実在性の根拠なのだカントは考えた。しかし右手の意味を絶対空間との関係で考えると、絶対空間は大きな右手の形を持つというグロテ

スクな考えになりかねない。「身体を持たない純粹な精神である存在者（たとえば天使）」が、道の上に切り落とされた人間の片手を右手か左手かを判定するときにはそのように考えるより他はない。なぜなら天使自身は身体を持たないし、手をもたない。単なる精神であり、ヨハネ伝によると単なる息もしくは風（プネウマ）だから。ところがカントは後になって『プロレゴメナ』の13節で右手と左手との関係を「概念によって理解させること」を諦め、「この関係は直接に直観に関わるのだ」とし、空間を感性の形式とするにいたる。またカントは人間が自己の位置を定位できるのは右と左の感情の相違によるのだと考えた。

方向定位するというのはドイツ語ではSich-Orientierenといわれるが、もともとは「太陽の昇る点を見出す」ということを意味したのである。朝太陽を拝むときに右と左との感情の差異が与えられていなかったら南北を区別できない。このことは次の思考実験からわかる。たとえばひそかに星座の位置を東西逆にするとか、あるいは家具がひそかにもとの鏡像の位置に置きなおされた室内では光が入らぬ限りひとは自分の位置が分からない。カントは、「（そのばあい）もとより自然によって与えられたが何度も使用することによって身についた右手と左手との感情による差別能力が人間の味方となるのだ」という。第一に、問題となっている対象に面しそれを吟味している誰か（その身体をも含めて）によって左右の記述はなされる。第二に人間の身体の二つの側面は十分に気づかれた感情によって区別され、この区別を外界に投入することによって空間の異なった領域を区別する。第三に私たちは左右の区別の外的事物及び私の身体への適用を学び取る。つまり、左手と右手の外見的な区別と身体の感情における相違を結合するのを学び取る。

しかるに、この再分析をさらに大きい「地平」において吟味し意味を読み取ることが必要だ。ウイトゲンシュタインは『論理哲学論考』のなかでカントの問題に触れているが、左手の手袋も裏返せば右手に使えるのだから4次元の空間ではカントの問題は解けるのだという。しかし、これは一種の機知以上のものでしかない。なぜなら、第一に手袋自身が3次元空間の対象のうちでの私生児であり、第二に3次元の物体を4次元にもってきて解くような解は期

待以上のものではない。それでも一步譲ってウィトゲンシュタインの解が正しいとしても彼が解いたのは「3次元空間では左右に合同にならないものも、4次元空間では合同になりうる」というということにすぎない。ここでも右と左の方向そのものの意味はまったくあきらかになっていない。

私のみるところでは、感情そのものをではなく、感情を内に含む身体性そのものの空間化を実存の運動としてとらえるのがよい。私の解の提案は、実存の運動、人間存在の在り方として右と左の意味をとらえることである。

左右の意味の客観的確定はさしあたって両者の定義を求める。まず左右の定義の手がかりを内臓器官の位置に求めることはできない。なぜなら事実問題としてすべてのシャム双生児の一方、および少なからぬひとびとは普通の身体の鏡像を内臓としてもつ。つまり心臓を右に肝臓を左に持つ人が現実にいる。第二に権利問題として《res extensa としての身体、つまり生理学者や医者が対象として取り扱う身体=物体》と、《知覚器官としての私とそのつど生きていてる身体》という身体の両義性を無視することはできない。左と右の意味は明らかに第二の知覚器官としての身体に、内臓は第一の身体=物体に帰属している。

さて、私が生きていてる身体の内的感情(内感)にだけ左右の相違の起源をみるのは正しいのだろうか。私の身体は周囲の世界に取り囲まれている。周囲の世界、環境世界を捨てた私の身体は考えることができない。環境世界を捨てたとき私の身体も無となっている。だから「身体の内部の左右の内感を、外界に投入すること」は外界から分離され、隔絶された身体という考えを含んでいて矛盾をはらんでいる。

むしろカントが暗黙のうちに主張していたことを捉えなおすことにしよう。「左と右との差異という主観的感情」を考えたとき、カントはどうして身体性と生きられる空間というものに気づかなかったのか。フッサールはいう。「身体は方向定位の点の担い手つまりゼロ点になる。此処と今との担い手となる。・・・方向定位の中心としての身体を明示するのは別としても感覚の構成的役割によって身体は空間世界の設立のためという意味を受け取る。」

人間が生活している世界を形式として取りだし、その形式を部分と全体が織り成す構造として取り出

すことは一体何を意味するのか。それは、人が生きる身とその〈身〉のおかれている周囲空間を一体のものとして主題化することだが、この点で左と右との方向の差異を顕在化することは決定的な意味を持つ。なぜなら上下(重力の係数)、前後(眼の見えるところと見えないところ)の区別は客観的に与えられているとあってよいが、左右はどのようにしても明らかにならないから。このことはハイデッガーが師のフッサール以上に鋭く暗示的にはあるが気づいている。カントは先駆的に多くのことを明らかにしたのだが、ひとつだけ誤っている。それは、感性に受動性しかみとめなかったことだ。理由は、カントの認識論では身体性が欠落しているからだ。私が家を見るとき私は大地の上に立ち、目や頭を家に向け、同時に身体を一定の態度に保っている。またさまざまな家をさまざまな視点から眺めるほかはなくそのためには身体全体を家のまわりで動かす必要がある。したがって感性の受動性には同時に能動性が含まれているはずだ。私の身体は絶対的な此処であり、諸感覚の寄木細工ではなく、ひとつの体系であり、周囲の空間やその諸方位との関係を含んでいる。私の身体の運動感覚の自由な変更によって、たとえば歩き回ることによって其処を此処にするときに、其処と身体とが属する方位付けはさまざまに変様する。このとき知覚し働いている身体性との志向関係によって空間が私の第一次的圏域において構成される。フッサールはいう。「私は知覚の働きにおいてあらゆる自然を、したがって自然のうちに含まれている私自身の身体をも経験する。」いずれにせよ右とか左とか言う方向も身体と言う絶対的此処への方位付けに属している。(ちなみに方向のフランス語であるsensは「方向」と「意味」の二つの意味を持つ。)この「方位付け」は生活世界に内在するアприオリな構造であって、恣意的なものではない。フッサール自身は、「右という方向は私の身体の右側あるいは右手を指示する」というのみだがこれはギリシャ語の手の意味をいちおう意味している。すでに述べたように、手は同時に側面をも意味したから。したがって結局、右の「意味」は私の身体の右手によって生きられ、演ぜられている。右の意味も左の意味も私が自由に意のままに生きることによって、言い換えれば、「私の為し得る(Ich-kann)」によって、他方で、身体性も左右の方向も空間的自然

とともに意味充実されている。つまり構成されている。この「私ができる」こそ、私の実存のたえざる世界への自己超越の運動の始まりである。

ベルクソンよりも30年以上も前に、パリの秀才校、高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリエール）に学んでいたルイ・パスツールは、この左手と右手の差異の問題を酒石酸の結晶の研究の中で取り扱った。彼はもともと絵画に才能を発揮した。これはルイ・パスツールが世界をよく観察することに秀でていたということを示す。しかし、結局、ルイ・パスツールは画家にはならず化学者になった。当時の化学の世界の結晶学の問題を受け止めて酒石酸、tartaric acidと塩類、saltの研究を行った。これは綺麗な結晶形を作りやすいからだ。

ルイ・パスツールは、次のように述べている。「私の作った総ての結晶を観察者である自分（私：身体から発する外の世界を眺めるパースペクティブの零点）にたいして垂直な平面に向けて並べて見るという思いつきが幸運にも浮かんできた。そしてパラ酒石酸塩のアシメトリな面の方向性から二つの群に分けられることが分かった。一つの結晶群では、・・・私の身体に近いところに並べた結晶のアシメトリな小切面の光に対する方向性から見ると私の右方向へ傾いているが、他の群においてはアシメトリな小切面は、私の左方向に傾いている。パラ酒石酸の結晶は、あるアシメトリなものは右へ、他のアシメトリなものは左へと言う風に二つのアシメトリな結晶の混合物のように思われた。」これらの二種の酒石酸、つまり左方向性を示す酒石酸と、右の方向性を示す酒石酸は、相互に鏡像の関係にあることが確認された。ルイ・パスツールは明瞭に自己の身体、観察者の自分、観察者の身体がもつ「パースペクティブに対する零点」に対して、酒石酸塩類の結晶が右方向か左方向かに傾くことを発見した。このときの右と左の意味は、あくまでもルイ・パスツールの身体を中心地点、身体の零点に対して明らかになる。右と左の区別の中心は、彼の身体が空間において占める地点に相対的なのだ。しかも右への方向性を示す酒石酸と、左への方向性を占める酒石酸とは相互に鏡像であるということを呈示した。

ルイ・パスツールの発見は、①彼の身体性がもつ空間のパースペクティブの基準点との相互関係にお

いて酒石酸の結晶が左旋回と右旋回に分かたれることにあった。②二つのタイプの酒石酸の結晶が、手袋の右手と左手のように、相互に鏡像の仕方で関係付けられる。これはまさしくカントが発見した右手と左手の方向の意味を結晶化学の分野で確証することになる。いいかえると、化学といえどもまったく中性的な空間の世界に位置しているのではなく、空間における左と右の質的な意味の差異を引き受けており、デカルト主義者の主張するような質的に無差別で中性的な空間、伸び広がった空間（res extensa）というものはありえぬ。

結論として次のことが言えよう：まず右と左を客観的に定義することはできない。しかしこのことは私にとって否定的な結論ではない。つまり右と左を客観的に定義できないということは意味の客観的—科学的な確定が不可能であることを意味している。これは、実は、われわれの各自の身体性への帰り行きをうながしている。つまり、生きられ、演ぜられる意味が残っている。私は一定の身体的な態度をとりながら世界へと自己を乗り越えて超越している。この運動には左右の方向の定位を遂行する身体の空間化が参与している。メルロー・ポンティは知覚の際にはまず子供が身体図式を形成し、態勢を整えることが必要だという。もし私たちが左右の方向の差異を失えば（それはとりもなおさず〈私はできる〉の圏域を失うことだが）私たちはいかなる意味でも実存することはなく「生きられる距離という自由な空間」を失う。実存喪失とはまた世界の喪失を意味することでもある。